

ジェンダー研究の方法論的検討

成末, 繁郎
九州大学

<https://doi.org/10.15017/2244149>

出版情報 : 九州人類学会報. 19, pp.92-95, 1991-11-20. 九州人類学研究会
バージョン :
権利関係 :



ジェンダー研究の方法論的検討

成末繁郎

1. 「研究する」という行為について - 「客観性」についての予備的考察

研究するとはどういう行為なのだろうか。今後、研究者として生活していく以上、その出発点である小論で自分なりの意味付けをしておくことが重要と考え、研究という行為をめぐって第一章で論じた。筆者は研究という行為は対象について自分の知覚したことを任意の方法論の作法にそって知識に加工し呈示することと捉える。したがって、対象そのものに「まとまり」や一貫性が本来的に備わっているものではなく、知覚が知識へと加工されていくうちに「まとまり」や一貫性を持ち始めると考える。つまり加工法=方法論が対象の形態を決定しているという立場にたつのである。こうした方法論と対象が不可分であるような観点からすると従来の、観察者とは独立に対象が存在することを前提とした「客観性」は成立し得ない。なぜなら観察者とまったく相互作用をしない対象を想定し得ないからである。したがってこの立場において「客観性」を追求し得る唯一の道は、「実在」を観察しているという幻想から脱却し、自分自身が使用している加工法=方法論を意識化し、反省して、自身が知覚した直観的な理解に少しでも近い記述ができる方法に革新していただけないのである。

この考え方に沿って第二章、三章では自分自身のジェンダー研究の方法論を反省する作業を、フェミニストたちの理論を手がかりにして行なった。

2. 分裂したリアリティ - フェミニズムの視点 -

第二章では、三人の女性のフェミニストの議論を追い、女性たちが如何なる状況のなかで生きているかについての彼女たちの認識を探った。

江原は女性たちの社会経験が私的領域に限定されることによって不当に低く評価されていることに異義を唱え、私的領域も立派な社会領域であり、語るに値するものだと言った。しかし目覚めそして語り始めた女性たちを待っていたのは、自分たちの社会的経験を男性の概念装置や用語で語らねばならないというジレンマであった。つまり男性の社会経験を秩序づける、言語の意味システムに依存して、女性の経験を語るかぎり、自分たちが本当に語りたかったことが歪曲されて伝わってしまうのである。例えば、「女性は働くべきか否か」という問いがよくされるが、この問いにフェミニストたちは女性が労働していなかったと認めることになり、主婦としての家事・育児という私的領域の労働の貴重な経験を男性と同様に無視することになってしまうのである。このように、語り始めた女性をいつのまにか追い込んでしまう意味システムに自明性として埋め込まれた権力作用を解明することに江原は向かう。

それに対し上野は、徹底的に男性の概念を駆使することで、女性の抑圧の実態を明らかにすることを試みる。すなわち近代社会は市場というシステムとそこに労働力という資源を送り込む端末として家庭

を配置した社会システムと上野は捉え、このシステムを最も効率的に機能させる原理を、家父長制的資本制となづけて分析するのである。この体制の下で、女性は、資本制が支配する市場内では家事労働、再生産労働を担うべく運命づけられた存在として二流の労働者と換算され賃金格差を受け入れさせられ、家庭では、家父長制の支配の下で家事労働や再生産労働といった無償労働を一方的に強制される幾重にも搾取される存在として呈示される。こうした家事・出産・育児等を、払われて然るべき賃金がいまだかつて払われたことがない生産労働と捉え、愛とか母性とかいうイデオロギーの曖昧さを徹底的に排除して論じきり、相互反照的に語れない部分を浮き彫りにする戦略を上野は取ることで、男性のポキャブラーにない言葉に至ろうとしている。

小倉は、いかに女性が純潔のイデオロギー、性愛のイデオロギー、母性のイデオロギーによって選択の自由の剥奪された、従属的な生き方を強いられているかを明らかにする。例えば強姦の被害を受けた女性が、どうして裁判官や検察官に対し、性的に慎み深い、おしとやかな女性として自分を呈示しなければならないのか。被害者の性格が、あるいは生き方がどうあれ、加害者のおかした罪は変わらないはずではないか。こうしたイデオロギーの強制の下で女性が結婚・出産に追い立てられている以上、女性はその性を搾取されている、つまり「強姦されている」と小倉は論じるのである。

これら三人のフェミニストの論点をまとめると、女性の社会的経験の固有性（分裂したリアリティ）、性別役割の固定観念に対する異義、家父長制の存在の三点に収斂すると考え、これらを「フェミニスト・パラダイム」として定式化した。

3. 統合されたリアリティ —人類学者の見たもの—

第三章ではフェミニスト・パラダイムを基に、人類学者の対象社会での経験がどう読み変えることができるかを呈示し、自分を含めた人類学者の知識への加工法の傾向を探り出すことを試みた。このときトラック社会の研究者を選んだのは、自分の研究領域であることと同一の社会の研究をそろえることで研究者によって解釈がまちまちであることを示し、研究の傾向性とその対象社会の特異性にあるという可能性を排除できると考えたからである。

母系制で、妻方居住のトラック社会の記述において、須藤は同じ情報に基づき、同一の主題で二つの文献を生産したが、この二つの文献の間にはズレがあることを指摘し、そのズレが、実は須藤がトラックの母系社会で女性が経済的に自立し男性と対等に権力を持っているように呈示したいがために生じたものと解釈し得ることを示した。

それに対し石森は、男性と女性との間の労働総量のアンバランスに言及し、いかに男性が働かないかを証言し、さらに、この社会の女性が「ロープット（劣った人）」と呼ばれて差別されるのはなぜかについての考察にむかっている。また言葉の意味システムにも男女でズレがあることも探り出し、月経小屋に対する意味付けの違いを、女性からも情報を聞き出すことによって発見している。こうして石森は男性と女性とはまったく別々の世界に生きていることをはっきり把握するのだが、彼は以上の情報から、それら別々の世界がうまくバランスをとり、そして融け合って社会が形成されていると論じてしまうのである。この見方は女性から見たものでないことは確かである、なぜならトラック社会で平等を説くキリスト教の神父の言葉に最初に耳を傾けたのは女性だったからである。

河合も女性と男性が独自の世界に生きることを認める。つまり女性は家庭領域の中心であり、男性は公的領域の中心である、この二つの中心をめぐってトラック文化が形成されていると考えるのである。そして女性と男性がどのようにそれぞれの中心に結びついていくかを、中心を示すトラックの語句を収集しその隠喩的連関を探り出すことで論証しようとしている。ひとつの中心を示す語句は「腹」であり、農作物を豊富に生産する土地を指すこと、その一方で農作物が「子ども」と呼ばれることから、土地＝女性、土地＝腹、したがって女性＝腹と結論する。もうひとつの中心を示す語句は「頭」であり、島のリーダーを頭と呼び、リーダーは男性だから、頭＝男性となる。ところが、河合は余計なことに、頭と「石」を連関させようと躍起になる。これは、腹が好きとか嫌いとかの感情を示す言葉の一部に使われることから、理性を示す言葉の一部に使われている言葉を探しだせば、頭と連関させることができると考えたからである。そして石が信用とか動じないことを示す語句に使われていることから、石＝頭としてしまった。しかし石の使い方を丹念に追っていくと、石は頭と繋がるのではなく、固定することの隠喩であることが解るのである。このようなミスをしてしまうのは、河合が自分自身の男女に関する固定観念を相対化しえていないからである。だからこそ、この二つの中心性はそれぞれの次元で価値を認められつつ互いに調和しているかのように河合は安易に結論してしまうのである。

以上、三人の人類学者の解釈の傾向性を整理すると「男女が経済的に自立し、対等な資格で生産物を交換し、たしかに男女独自の世界に生きているが、しかしそれらの世界がうまく溶け合い、それぞれに課された相補的な役割を全うするかぎり、バランスのとれた、まとまりのある社会」であるかのようにトラック社会を見たがっているとなる。この見解はフェミニスト・パラダイムからすると、女性の社会的経験の固有性を無視した、ステレオタイプの解釈であると批判し得るのである。

4. 結 論 —ジェンダー研究の実践的方法について—

第四章では、この批判を回避し、女性の社会的経験および認識を男性のそれと同様に尊重する実用的な方法を探った。

まず、フェミニストたちの主張する男女の間の共約不可能なリアリティの存在を研究の出発点に据え、男女一体となつてうまく社会を維持しているという風に安易に解釈しないことを肝に命じる。そしてこの前提を実践するため第一に情報がどちらの性から得たものかをはっきりさせることを提案する。こうすることでどちらの性から得た情報で対象社会が解釈されたかが解り、あるひとつの観点から見たリアリティであることが明確になるからである。第二にどのような主題であれ男女双方から可能なかぎり情報を得てきて、男性と女性のそれぞれの情報に基づく解釈を並記することを提案する。こうすることで現実を一枚岩的に記述してしまうことを最低限避け得ると考えるからである。

今後は、この方法に沿って、実際に自分でフィールドワークして情報を収集し、解釈を試みたい。

参 考 文 献

- 江原由美子, 1988, 『フェミニズムと権力作用』, 勁草書房
- 石森 秀三, 1985, 『危機のコスモロジー』, 福武書店
- 河合 利光, 1989, 「腹の心と石の心:トラックにおける性差と中心」, 『国立民族学博物館研究報告』別冊6号
- 小倉千加子, 1988, 『セックス神話解体新書』, 学陽書房
- 須藤 健一, 1985, 「ミクロネシアにおける母系制社会の変質」, 『国立民族学博物館研究報告』10巻4号
- 須藤 健一, 1989, 『母系社会の構造』, 紀伊國屋書店
- 上野千鶴子, 1990, 『家父長制と資本制』, 岩波書店
- Wagner, R., 1981, *The Invention of Culture*, University of Chicago Press.